連載 関係からみた子どものこころと育ち

第4回 関係からみた発達障碍

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

自閉症と母子の関係障碍

C男：初診時3歳6カ月，DQ（発達指数）50，中等度精神遅滞水準。

主訴：ことばの遅れ，ひとり遊び，視線が合わない。

家族構成：会社員の父親，専業主婦の母親，C男の3人家族。1カ月前に遠方から転居してきたばかり。父親は多忙で週末しか子どもの相手をできない。母親はまだ周りに相談できる友達もいないが，表向きは健気に振る舞っている。父親の両親はずいぶん前に他界し，母親の両親も遠方に住んでいて，身近に頼る人がひとりもいない。

生育歴：胎生期はとくに問題はなく，乳児期の身体運動発達のマイルストーンも良好だった。10カ月頃に「パパ」「ママ」と発語したが，それ以来ことばの発達が遅れている。パズルやブロックなどを使ってのひとり遊びを好み，呼びかけにも反応が乏しいため，1歳半のときに某病院にて聴力検査と発達検査を受けた。聴力での異常はなかったが，発達の遅れを指摘された。まもなく保育園に入ったが，集団行動がとれず退園を余儀なくされた。その後，一度母親の実家に戻ったが，近くの小児科で自閉症ではないかといわれ，精査を希望して筆者のところに受診となった。

SSP（新奇場面法）での母子の関わり合いの特徴

はじめは母親と一緒にいてもマイペースで動き回り，母親の誘いにも回避的反応を示していた。1回目の母親の退室では，出ていく母親をちらっと見ながらもST（ストレンジャー）がいることでさほどの不安を示すことなく，遊び続けていた。母親との再会でもとくに目立った反応はみられなかった。しかし，2回目の母親退室でひとりになった途端に，急に不安がり周囲を見渡しながら激しく泣き始めた。まもなくSTが入室してなだめたが治まらず，すぐに母親に入室してもらった。すると母親の姿を見るなり，嬉しそうな表情を浮かべ，近づいて抱かれたがった。母親はぎこちない仕草で抱き寄せたが，すぐにC男の後ろにあった遊具を指さしてC男に遊びを促した。

C男はすぐに泣き止んではいたが，なぜか母親は積極的に抱き寄せてあやそうとせず，受け身的な態度が印象的であった。その後，C男はいろいろな玩具を手にとって，母親に見てもらいたそうに声をかけていた。しかし，それに対する母親の応答はどこかぎこちなさを感じさせた。C男のアタッチメント・タイプはBタイプ（安定型）[注1]として捉えてよいであろうが，アタッチメントの

注1：SSP（Strange Situation Procedure，新奇場面法）において分離時に多少の泣きや混乱を示すが，養育者との再会時には積極的な身体接触を求め，容易に静穏化するタイプのアタッチメントを示し，養育者を安全基地として，積極的に探索活動を行うことができるものを指す。C男の場合，分離と再会時の反応からはこのBタイプ（安定型）と判断されようが，C男にとってはいまだ養育者が安全基地としての役割を果たしていない。それには養育者側の要因も深く関係しているのであって，アタッチメントの問題を子どものアタッチメント行動のみで判断することには慎重でなくてはならない。

小児看護，32(4)：504-506，2009.

問題を「関係性」の視点から考えていくことの大切さが，次回明瞭に浮かび上がってきたのである。

次回の印象的なエピソード

1週間後，C男は前回よりものびのびと遊び，いろんな玩具に好奇心を示していた。筆者にはC男の行動の意図がとてもわかりやすく感じられた。しかし，両親には何をどう遊んだらよいか戸惑いが強かった。C男の気持ちの動きをなぜか感じとることが難しかったのである。

C男と両親が一緒に遊んでいたときであった。C男は前回からとくにクルクルスロープを気に入っていた。車をスロープの上に乗せては降りていくのをじっと眺めて夢中になっていた。何度か繰り返すとほかの玩具に移るが，しばらくすると再びクルクルスロープに戻るので，C男はクルクルスロープで遊んでいるとなんとなく落ち着くのかなという印象を受けた。しかし，このようなひとり遊びに夢中になってしまうのが母親には気になるのか，そばにあったトランポリンに注意を促し，C男を抱っこして遊ばせようとするのだった。少しの間，C男は付き合ってはいたが，まもなくクルクルスロープのほうに戻っていった。

そのあとしばらくしてからのことである。C男はどことなく甘えたそうに身体をくねくねさせながらマットの上にいた。家庭でいつもやりたがるらしい逆立ちをしようと，懸命にマットに腕をついて，両足を何度も上げようとしていた。最初，父親の手助けによって逆立ちができたので，何度もやりたそうにしていた。それを見ていた母親はなぜか「自分でやってごらん！」と，どことなく突き放すように声をかけるのだった。

母親にみられる甘えをめぐるアンビバレンス

このときの母親は，C男が母親を頼っているにもかかわらず，ひとりでやるように促している。C男の甘えを受け止めることなく，自立を促すような働きかけをしている。その一方で，C男がクルクルスロープでひとり遊びに夢中になっていると，トランポリンに強引に誘って遊ばせようとしている。C男が自分を求めてくれないときには，母親のほうから遊びに誘っているのである。ここに母親自身の甘えをめぐるアンビバレンスを見てとることができよう(図1)。このように母子ともアンビバレンスが強いがゆえに，両者間で負の循環が生まれ，関係障碍がもたらされている

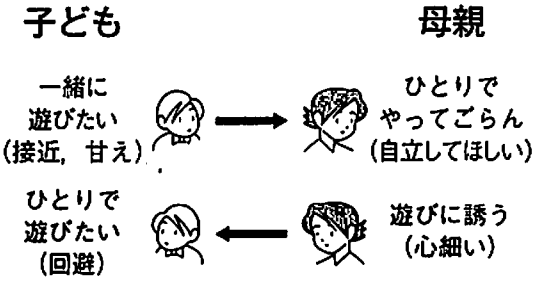

図1　母子のアンビバレンスと関係障碍

ことがわかる。

では，なぜ母親にこのようなアンビバレンスが起こるのであろうか。それは母親自身の生い立ちに起源をもつことが，前回紹介したAAI(アダルト・アタッチメント・インタビュー)で浮かび上がってきたのである。

AAIにみる母親の生い立ち

AAIで以下のような事情が明らかになってきた。複雑な家庭事情で，母親は生後10カ月のとき，遠くの親戚の叔父叔母夫婦に小学1年生になるまで預けられたという。叔父叔母夫婦はとても面倒見がよく，本人もさほど不自由なく生活できたが，少しでも早く自立しなくてはという思いと，年に一度しか会えない母親の喜ぶ顔見たさに，一生懸命に勉学に励んでいたという。このようにして育った本人にとって，子どもの甘えがどういうものなのか，頭ではわかろうとしても実感としてはつかめなかったというのは当然であったのであろう。そのためC男が甘えてきても，母親の身体はつい回避的に反応してしまっていたのである。

AAIでの「できるだけ小さい頃から始めて，お母さんとの関係を表すような形容詞やことばなどを5つあげてください」との質問に，本人は「友達」と「先生」の2つのことばで答えている。具体的には，「(母は)祖母のような家庭的な人ではありませんでした。私を守ってくれるという存在ではなく，頼りになるという人でした。母はすごく強いイメージがあったので，何かを相談したときには安心することができました。相談したときには具体的なアドバイスをくれましたから。母とはいろいろ話はしましたが，甘えることは少なかったです」と語っている。

そのほか，とても印象的であったのは，本人に「ご自身が子ど

もだったころの経験から，とりわけ学んだと思うことはありますか。子ども時代に，あなたが経験したことから学んだと感じることをお聞きしたいのです」と尋ねたとき，「強さ。どんな場合でも最初は人に頼らないで自分でやらないと(だめ)。自分でやるしかない。そういう強さがないと何もできないんですよ」とはっきりと回答したことである。現在の子どもへの関わりを彷彿とさせる内容である。しかし，AAIを実施した筆者には母親の語りそのものに突き放すような冷たさは感じられず，彼女自身の乳幼児期を想像すれば，このような信条を胸にしてこれまで生きてきたのも当然だろうと思われた。

AAIでの評価は，叔父叔母夫婦がとてもよく面倒を見てくれたこと，さらには自分の両親に対する回想も冷静に語り，面接全体での話の流れも一貫性が保たれていることから，安定自律型[注2]と考えられた。

母子関係はどのように変容していったか

C男はセッションのなかでしだいに自分の気持ちや意図をわかりやすく表に出すようになっていったが，母子関係は相互にアンビバレントな状態がしばらく続いた。そのなかでC男のことばや行動の背後に動いている気持ちのありようを，そのつど一緒に考えながら根気強く取り組んでいった。さらには，母親同士の近所付き合いも少しずつ増えていくにつれ，母親は明るさを取り戻していった。そして通園施設に通うようになって同じような悩みをもつ母親仲間ができると，以前のはきはきとした自分を取り戻すとともに，C男も母親に遠慮なくまとわりつき，そんなC男を抱きよせながら，うれしそうに語るほどになっていった。母子の関係改善にはかなりの期間を要したが，同じような境遇の母親同士の結びつきがいかに大きな力をもつかを，本事例で筆者は痛感したのである。

発達障碍を関係からみることの意義

これまで発達障碍，そのなかでも昨今とくに注目されている自閉症をはじめとする広汎性発達障碍(Pervasive Development Disorders；PDD)は脳機能障碍を基盤にもつ子ども自身の，つまりは「個」の障碍とみなす考え方が広く浸透している。いまでは対人関係を中心に，発達になんらかの問題をもつ子どもたちに対してPDDの診断が濫用されるまでになっている。

発達障碍とは本来，発達過程でしだいにその問題が顕在化していくものであるが，その過程は子どもの個体側の潜在的な問題のみが露呈してくるといった単純なものではけっしてないはずである。ヒトは両親をはじめとする周囲の大人たちによる養育をとおしてしだいに人間となっていくのであって，その過程は「(個体の)素質」と「(養育)環境」との複雑な相互作用によって進展するものであることは，いまさら言うまでもない。このことは発達障碍と診断されている子どもたちにおいても同様である。

本来，発達過程は，土台が育って，その上に上部が組み立てられていくものである。本連載で取り上げている事例はすべてこの土台となるアタッチメント形成になんらかの問題を抱えているという共通の特徴をもっている。そこでの関係のありようをつぶさに観察し，子どもと養育者とのボタンのかけ違いを修復できるか否かが，その後の親子の成長過程を左右するほど重要な意味をもっているのである。

今われわれに求められているのは，このボタンのかけ違いが実際の親子関係の中でどのようにして起こるのか，その結果「素質」と「環境」とのあいだでどのような相互作用が生まれるのか，まずはその実態をありのままにとらえてゆく作業である。障碍といわれるものはその結果のあらわれだと思われるからである。

注2：AAIはSSPのタイプとの強い関連が指摘されていて，安定自律型はSSPのBタイプと関連性が高いと考えられ，過去のアタッチメント関係が自分の人生や現在のパーソナリティに対してもつ意味を深く理解しているタイプである。自分のそれまでのアタッチメント関係の歴史を肯定的な面と否定的な面を併せて，整合一貫した形で語ることができ，他者および自分を深く信頼しており，対人関係は全般的に安定しているとされている。